モン・サン・ミシェルとセント・マイクルズ・マウント

朝　治　啓　三

ヴォラギネ『黄金伝説』によれば、大天使ミカエルになぞらえられる、アンチ・キリストとの戦いの主人公は、5世紀ごろ南イタリアのガルガーノ山の羊飼いの放った毒矢の向きを変えたという。司教が神に事の故を尋ねると、聖ミカエルが現れて自らがその地の守護者であることを教えたという。アプリカの町の近くトゥンバの山は海に囲まれた島であるが、聖ミカエルの日（9月29日）に2度潮が引いて陸とつながり、参詣者がそこを歩いて島の教会に詣でる。伝説によれば8世紀、ある身重の婦人が渡る途中で潮が満ち、溺れそうになったところを聖ミカエルが救ったという。アプリカは現代フランス語ではノルマンディのアヴランシュ（写真5）のことで、その地の司教の夢に現れた聖ミカエルのお告げにより、その島に最初の礼拝堂が建てられ、その後ベネディクト派修道院が開かれて、モン・サン・ミシェルと呼ばれるようになったといわれている。（写真1，2）

伝説によれば、イングランド南部の世界遺産都市ペンザンスの近くにあるセント・マイクルズ・マウントの島には、コーモランという名の巨人が住んでおり、大食漢で村人の羊などを盗んで食べていた。ある日ジャックという名の少年が巨人の寝ている間に穴を掘り、角笛で起こして穴に落としめた。495年頃大天使ミカエルの幻影がその地の漁夫の前に現れたことから、6世紀までには巡礼地となっていた。11世紀にフランスのベックの修道院長によって島の頂上に礼拝堂が建てられ、後にベネディクト派の修道院が開かれたという。この島に渡るには、現在でも干潮時に現れる道を利用する。（写真3，4）

仏ノルマンディと英コーンウォールのそれぞれのモン・サン・ミシェルに共通するのは、本土との間が砂州でつながった小島に礼拝堂が建てられていること、そのきっかけが、聖ミカエルが司教や漁夫の夢枕に立ってのお告げであったこと、アンチ・キリストになぞらえられる巨人の介在であろう。注目すべき点は、いずれも信者の信仰を促進する超現実的霊験が、礼拝堂設置のきっかけになっているということである。

現在では、ノルマンディのものは限られた数の修道士が居住するものの、修道院としての実質は失われており、国家が施設を管理し観光用に公開している。コーンウォールのそれは、16世紀の修道院解散によって国王管理下に移され、17世紀の革命時に個人所有地となり、現在もその家系が所有している。施設の管理はナショナル・トラストが行い、観光用に公開している。

両施設とも中世においては社会から隠遁した修道士のための施設であり、旅人の救護所や老人の介護所としても機能していたが、俗人信徒に公開された場所ではなかった。公開されたのは19世紀になってからである。このように施設の設置者の目的は、時代によって異なる。

古代ギリシャにおける、デルフォイの神殿という博物館になぞらえられる施設の設立目的は、岡道男に拠れば、ポリスの市民の宗教と学問研究意欲促進であったという。神官の職は閉鎖的ではなく、途中で辞任する者もいたが世襲する者もいた。政策の当否、戦争の可否等についての神託を得ることが神殿設置の目的であった。アレクサンドリアのムーセイオンには大量の書物が集められ、約100人の学者が研究し講義を行った。宗教儀式も不可欠で、シンポジウムにはプトレマイオス朝の王も出席して学者と討議した。限られた能力者のための施設であった。（『西洋古典論集　別冊』2001年、京大文学部）

中世においては、カロリング家のシャルルマーニュはヨーロッパ各地から学者をアーヘンの宮廷へと招き、その後彼らは教会や修道院の職務に就いた。その付属学校ではラテン語が教授され、フランク帝国の官僚養成の必要を満たす場となった。そこは古代とは別の意味で宗教施設であり、同時に権力維持のために機能する教育所であった。その意味では、自由な学問研究や、広く信徒一般向けに開放される意図は、そこには無い。

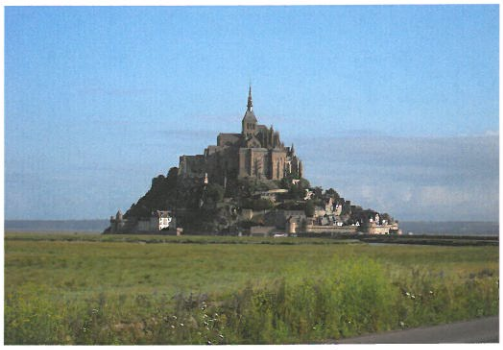

写真１　モン・サン・ミシェル

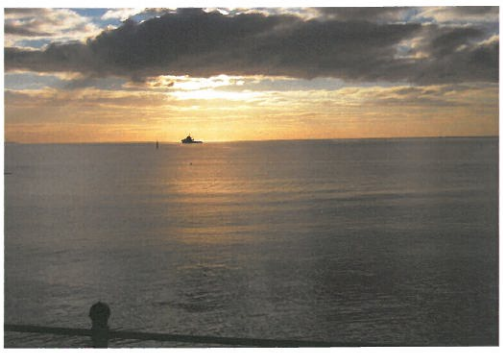

写真３　コーンウォールのペンザンスから見た
セント・マイクルズ・マウント

写真５　アヴランシュ

モン・サン・ミシェルの場合には、中世には修道院として権力者によって設立され、18世紀のフランス革命によって修道院としての機能を終えた。その後は宗教色や政治色が後退して、国家が国民のための観光施設として、一般客向けに公開している。セント・マイクルズ・マウントの場合もほぼ同様の道筋を辿った。世界遺産としての指定を受けてからは一層、国外からの観光客に対しても国内観光者と同様の開示が実行され、宗教政治性よりも文化的価値を強くアピールする博物館としての施設になった。

古代、中世の博物館と近代のそれとは、その設置目的が全く異なっている。19世紀に成立した近代国民国家における博物館設置目的は、情報の公開、知識の共有、知的レヴェルの向上であり、観客である国民に、国政の主権の一端を

写真２　モン・サン・ミシェルと本土をつなぐ道路

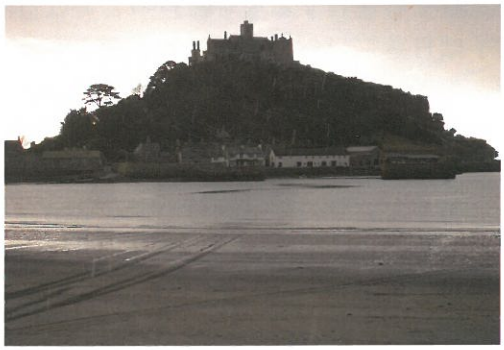

写真４　セント・マイクルズ・マウント満潮時

担う為に必要な情報を供用することである。施設運営者が多数の入場者を動員して営業収入を挙げるとか、人気のある展示や企画を考えつくことが学芸員の力量であると見なすのでは、19世紀になってようやく一般公開が始まり、運営が公的に行われるようになったことの歴史的意味を理解できない。

モン・サン・ミシェルへ現代の観光客が押し寄せるのは、信仰目的ではない。学問研究目的でもない。知識を獲得し、雰囲気を味わい、思考の肥しとするというのが、一般公開が実際に果たしている役割であろう。管理者・運営者が施設を公開する目的が信仰の奨励、学問研究の推進、その他の何であれ、観客にはその意図は強要され得ない。現代の公共博物館の公開が持つ社会的役割は、モン・サン・ミシェルによって具体的に示されている。

マルク・ブロック『歴史のための弁明』に拠れば、歴史好きの片鱗は博物館的知的好奇心に見られるという。人は何故博物館に向かうのか。博物館設置者は何のために展示物を公開しているのか。来場目的と公開目的が一致した時に、博物館はもっともよくその役割を果たすといえるであろう。博物館といっても人文系、社会系、自然系があり、公営と私営とで随分と異なるであろうから、一概には言えないが。

文学部教授　大阪都市遺産研究センター研究員